知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 ［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

December 2021 12

篠島八景を歩く

篠島八景を歩く!!

前号に続く篠島特集、今回のテーマは
八つの景勝地「篠島八景」を取り上げる。
明治・大正・昭和の島人が誇りにしてきた
往年の〝篠島ベストスポット〟を巡り、
歴史と絶景の島の魅力を探る。

島人の心に沁みる八つの情景

前号の扉ページで、昭和二十四年（一九四九）に発行された小冊子「篠島シリーズ」の五冊を掲載した。このシリーズは当時の篠島小学の教員が中心となって企画したもので、各冊子の前書きに「島をおとずれ、島を学ぼうとする幾多の小中学生の補充読物として、一般観光客の旅情をなぐさめる糧として、お役に立つことをのぞんでいます」という当時の校長の一文が記されている。奥付には「定価二十五円」とあり、船着場前の売店や島内の旅館でも販売されたようだ。

実は篠島シリーズにはあと一冊、地元に現物がほとんど残っていない第六号が存在する。タイトルは「篠島八景」。ここに掲載したのは、愛知県図書館所蔵の貴重な一冊である。

篠島八景とは文字どおり、篠島に点在する八つの景勝地だ。地図や観光マップに載っているのは広亀（島）、野島、帝井の三つで、あとはどこのことなのか、島人以外にはほとんどわからないのではないだろうか。これから各所にご案内するが、その前に「八景」について説明しておきたい。

八か所の景勝地を選ぶ「〇〇八景」は全国にある。もっとも有名なのは「近江八景」だろう。これは、十二世紀の中国で絵や詩文に盛んに取り上げられた「瀟湘八景」を下敷きにしている。瀟湘八景は、中国湖南省にある名勝、洞庭湖周辺の景色を選んだもので、留学していた禅僧によって日本に伝わり、京の上流階級の間で書画の題材として流行した。やがて、瀟湘八景に倣い各地で八景が選ばれるようになる。琵琶湖南部の風景から選んだ近江八景もそのひとつで、室町時代後期に初めて選ばれたとされる。その後、さまざまな選者によって追加や取捨選択がなされ、江戸時代初期になって下の一覧のように確定した。

では、篠島八景はいつ選定されたのだろうか。これを初めて世に紹介したのは、前号で取り上げた出村鋏の「篠島史蹟」（大正十年発行）だが、そこには「今人称揚する処のもの左の八景あり」と記されているだけで、いつ、誰によって選定されたかの記載はない。おそらくその頃に、歌や絵を趣味とする篠島の風流人たちが、何人か集まって遊んでいるときに選んだのだろう。あるいは島の知識人である出村も選者の一人であるかもしれない。

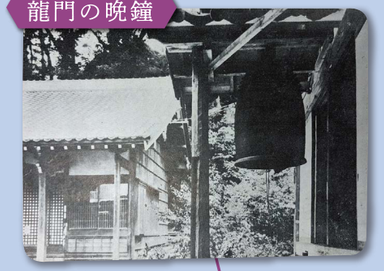
ただ、瀟湘八景や近江八景とは文言が少し異なっている。八景の基本形は「場所＋風景」で、風景パートは落雁（空から舞い降りる雁）、帰帆（港に帰る舟の帆）、青嵐（晴れた日に吹く風）、暮雪（夕暮れに降る雪）、秋月、夜雨、晩鐘（夕方に鳴る寺の鐘）、夕照（夕焼け）となっている。このうち篠島八景に盛り込まれているのは、帰帆、秋月、晩鐘の三つで、他の五つはオリジナルだ。

篠島に雁は飛来せず、温暖なので雪も滅多に降らないことを考えると、落雁と暮雪がないのは頷ける。一方で晴嵐、夜雨、夕照はあってもよさそうなものだ。しかし、八景に明確な定義があるわけではないので、地域の実情に応じてアレンジしたということだろう。また、風景描写の言葉ではない「恩水」という言葉も引っかかるが、選者たちは、島の誇りである帝井はどうしても外したくなかったに違いない。篠島八景は、目に見えるそのままの風景というより、島人の心を揺り動かす「情景」と解釈しよう。

瀟湘八景	近江八景	篠島八景
平沙の落雁	堅田の落雁	
遠浦の帰帆	矢橋の帰帆	蛭子の帰帆
山市の晴嵐	粟津の晴嵐	
江天の暮雪	比良の暮雪	
洞庭の秋月	石山の秋月	古城の秋月
瀟湘の夜雨	唐崎の夜雨	
煙寺の晩鐘	三井の晩鐘	龍門の晩鐘
漁村の夕照	瀬田の夕照	

篠島八景

龍門の晩鐘



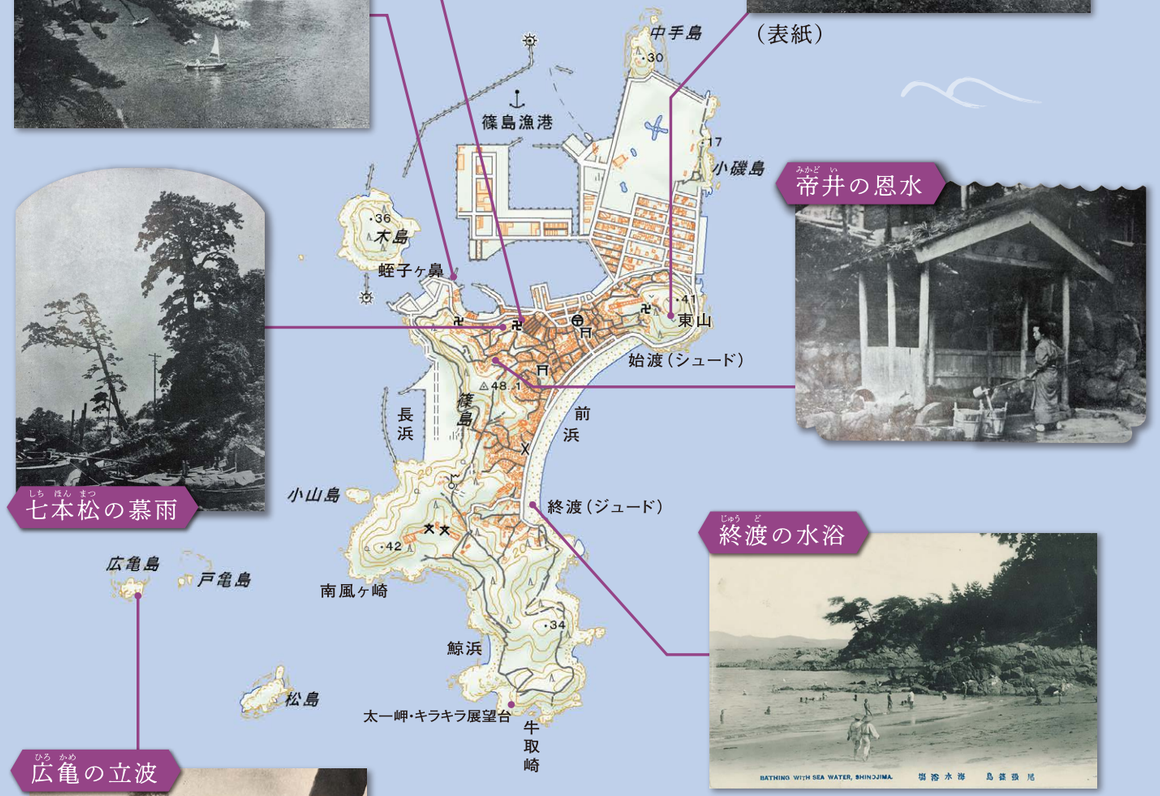
（P.06）

蛭子の帰帆

古城の秋月

（表紙）

七本松の慕雨



終渡の水浴

広亀の立波

（P.08）

野島の釣舟

（P.03）

地図は国土地理院の電子地形図25000を使用
図版は愛知県図書館所蔵「篠島シリーズ6 篠島八景」「篠島風景絵葉書」より

暮の鐘は四方の海にこだまして、わが世、わが身にしみ渡る。

（鵜飼利正「篠島八景」より）

寺の鐘が鳴り、漁船は港に帰る

その「帝井」と「古城」については、前回の特集で詳しく紹介した。古城は、篠島城跡にして義良親王の行宮跡である東山のこと。義良親王の史跡のうち、上陸地の前浜（伊勢浜／神風ヶ浜）は選から漏れてしまったのかと思うが、実は「終渡の水浴」は前浜の一部である。

終渡とは、前浜の南のはずれのことをいう。砂浜が尽きてごつごつした磯へと変わるあたりだ。篠島には、地図に載らない磯や浜の名前が数多くあるが、終渡もそのひとつ。なぜこう呼ばれるのか定かではないが、前浜の北端には「始渡」という対のような地名がある。

今でこそ前浜全域が海水浴場になっているが、かつて篠島の海水浴場といえば終渡のあたりだった。明治時代の半ば、健康増進のため海水に浸かる「潮湯治」の客が訪れるようになったことがその始まりで、やがて潮湯治客を目当てにした旅館が開業し、篠島の観光の幕開けとなった。となると、八景の選定は明治末期から大正初期にかけてということで間違いない。東山、帝井という史蹟とともに、新興の観光名所も盛り込むことで篠島をアピールしようという、当時の島人の意図も窺える。

戦後もしばらくは「篠島で海水浴といえば終渡」という認識は変わらなかったようで、篠島シリーズ第六巻では、次のように誇らしげに紹介されている。

神風ヶ浜の南につきる所、長砂美しく水清く、夏の人気を一手に受けた終渡の浜はまさに夏の天国であります。赤！青！黄!! 色とりどりの花模様。真夏の日ざしをまともに受けて、波間に躍るさんざめき、白砂に咲いたパラソルや、青い海、白い砂、人の波、海国日本の誇り、そして縮図であります。

さて、終渡のほかに地図に載っていないのは、七本松、蛭子、龍門の三か所だ。これらはいずれも島の北側にある。

七本松は、今はなき名木である。知多四国霊場番外札所・西方寺のすぐ下にあった。しかし、昭和三十四年（一九五九）の伊勢湾台風の影響により枯死してしまったという。今や島内に松の古木はほとんど残っていないが、篠島シリーズ第六巻には「全島松につつまれ、あるいは高く天をつき、あるいは低く海上にたれ、その美を一段とそえている」とある。かつては松が生い茂り、「東海の松島」という異名もあったほどだ。

蛭子は、島の北西端に突き出した「蛭子ヶ鼻」のこと。周囲が埋め立てられたので岬らしさは薄れたが、出港・帰港する漁船が蛭子ヶ鼻と木島との小さな〝海峡〟を行き交う光景は、今も昔も変わらない。

そして龍門は、知多四国霊場第三十八番札所である正法禅寺のことだ。この寺の山号は「龍門山」といい、静岡県袋井市にある徳川家康ゆかりの名刹、可睡斎の直末寺院という由緒がある。開山の等膳は、今川義元の人質だった幼い頃の家康を救い出し、篠島に逃がして七十日間世話をしたという伝承もある。

八景の題材となっている梵鐘は、本堂の軒下にある。江戸時代初期の正保二年（一六四五）、三州金屋の中尾作左衛門なる人によって製造されたもの（三州金屋は現在の豊川市で、中尾氏は室町時代から近年まで続いた鋳物師の一族）。「伊勢度會郡山田庄次橋郷篠嶋村」の銘が刻まれており、当時の篠島が伊勢国に含まれていたことを示す貴重な資料として、南知多町の文化財に指定されている。

今ではこの鐘を夕暮れ時に撞くことはない。しかし昔は、島人に時間を知らせる「時の鐘」として、親しまれていたことだろう。目を閉じれば、七本松の下で、正法禅寺の鐘の音を聞きながら、蛭子ヶ鼻の陰から帰ってくる船を待つ女性や子供の姿が、瞼の裏に浮かんでくるようだ。緩やかな時間が流れる篠島では、昔の情景を想像することはたやすい。

山道を辿り、伊勢を望む岬へ

八景の残り二つ、野島と広亀は篠島の沖合に浮かぶ無人島である。

野島は、篠島の周囲にある九つの島（埋め立てで陸続きになった中手島と小磯島を含む）のうち最大の島で、毎年七月に行われる「野島祭り」が有名だ。この島に祀られる野島神社へ海上安全祈願に行くため、漁船が船団を組んでパレードするというもの。コロナ禍のため二年連続で中止になってしまったが、その勇壮さは見ごたえ十分で、他の祭りともども来年こそ再開してほしいところ。また広亀島は、島というよりは海面に頭を出した巨岩である。

これらの島を眺めるには、終渡から始まる山道を歩いて、島の南側にある牛取崎に行くのがいい。鬱蒼とした木々に包まれ、小刻みに起伏を繰り返し、ところどころで断崖の上から海を見下ろすポイントがあって、なかなか面白い道だ。沿道にはかつて「山弘法」と呼ばれた弘法大師像が点々と安置されている。大正二年（一九一三）に開かれた四国八十八か所の写しで、今は「島弘法」の通り名で知られている。

篠島シリーズ第六巻の「広亀の立波」のページにはこのように紹介されている。

坂道小道のハイキングコース、足下にくだける波の音、南風の潮風老松にこだまし、数丈の断崖にきもひやし、たぐいな東海松島の景観は行くごとにくり開げられ、ああ勇壮なるかな！絶景かな！であります。

終渡から十五分ほどで牛取崎に辿り着く。島の南端の断崖上で、島から伊勢を望む最適の場所であることから、古くから伊勢神宮の遥拝所だった場所である。平成二十七年（二〇一五）の遷宮の時に伊勢神宮から下賜された材で建てた鳥居があり、「太一岬・キラキラ展望台」が設けられている。ここからすぐ南に見える、こんもりとした丸い島が野島だ。

北西を向くと、すぐ先に松の生えた三角形の松島が見える。その奥に巨岩が二つ並んでおり、左の平たいのが広亀島、右の尖ったのが戸亀島である。常に波に洗われている広亀島は、水中にぷかりと浮かんで甲羅だけを見せている亀のようで、広亀島とは言い得て妙だ。松島の姿もいいが、どこか味のある広亀島を八景に選んだのは、島の風流人の遊び心であろう。

釣舟やわれを画に見る小春なぎ、寒月や浪の花さく岩のかど

（出村鋏「篠島史蹟」所収の句）

〈取材協力、資料提供〉石橋伊鶴さん／龍門山正法禅寺／南知多町教育委員会／愛知県図書館
〈参考文献〉篠島史蹟（出村鋏／篠島史蹟復刻実行委員会）／知多半島篠島（河合いずみ）／しのじま（篠島郷土クラブ）／篠島シリーズ6 篠島八景（鵜飼利正、篠島シリーズ刊行会）／南知多町誌 本文編／南知多町誌 資料編／ふるさと大津歴史文庫6 大津の名勝（大津市教育委員会博物館建設室）